

布を巡る旅

第5回 ~インド~ 天蚕と緞織りの里 ヌアパトナ

後藤ふたば



上は木綿、下が絹の、共にサリーの一部。初めて見た人はプリントと間違える。それほど素晴らしく緻密な模様がそこには描かれているからだ。伝承の知恵と技、それ以外に何も持たない彼らが生み出す布。コンピューター制御の自動織機では出せない味と温かみ。彼らは間違いなく今日もサリーを織っている。

オリッサの州都を目指して、平原を西から東へ一駅ごとに遅れを積み増しながら走る列車は、6時間遅れでカタックに着いた。終点二つ手前のこの街に旅人が降り立つことは滅多にないだろう。オリッサには、ヌアパトナというタッサールシルクの里があると聞く。タッサールシルクとは、天蚕の一種のタッサール蚕から採る絹だ。林の木々に架けられた繭を集め、糸にする。家蚕の生産が始まる前は絹と言えどこれだっただけの素朴な糸。自然のままの様々な色と野性味を持ち合わせた絹は、インドでも輸出先の国々でも人気がある。

さてヌアパトナはどこにある。ネットの海を泳ぎ回り、おそらくはこのあたりと目星をつけたのがカタック近郊だった。翌朝、バスターミナルで地名を告げると、超満員の大型バスに押し込まれた。英語を解する人は一人もなく、ただ地名だけを頼りに運ばれること4時間。「ここだ」と降ろされたのは土ぼこりが舞い上がる田舎道。瘦せたコブ牛が引く荷車がゆつくりと道を横切り、草葺きの屋根が連なる路地がそこそこ、という小さな村だった。

ヌアパトナは村外れに小さな製糸工場もあるが、織りの村と言っていいだろう。小さな家内工房が肩を寄せ合い、主にシルクサリーを織っている。洗いな成りのタッサールシルクもあれば、色鮮やかな家蚕のものもある。村内を歩けばそこそこ織機の音がする。

男たちが生み出す煌めく精緻な緞

土壁の家が軒を連ねる小道に入ると、あちこちに糸で括りをかけた絹糸が張られているのに出合う。いかにも織り、それも緞織りの里の風景だ。織機の音がする一軒の民家に招き入れてもらった。土で作られた建物は天井が低く、中はひんやりと薄暗い。土間に大きな織機が2台据え置かれ、大柄な男が二人、横糸を巻き付けた木製の枠を、巧みに縦糸に潜らせながら平織りをしていった。インドでは、機織りは男の仕事であることが多い。サリーのような広幅の布を織るには、女性では少し力が足りないのだろう。

織られていたのは色鮮やかなサリー。オリッサ、なかでもこの近辺のサリーは精緻な緞模様で知られる。象や花といったモチーフを幾何学模様が規則正

しく囲むデザインは特によく見かける。「手元のデザインは撮らないで」と主が言う。新作なのだろうか。ピンと張られた布の手元を見れば見るほど、その柄の細かさに圧倒される。隣り合う糸の白抜き箇所は、コンマミリの世界。いったい誰が設計図を描き、どんな手順で縦横の糸を正確に測って括り染めているのだろうか。

工房はお世辞にも綺麗とはいえない。踏み固められた土がそのままの床、あちこち崩れ落ちている土壁、点いたり消えたりする電気、平気で歩き回るヤギや鶏。織り手の男の手は無骨で大きい。ここから、この織機から、あの精緻な緞緞が生まれているというのがどうにも信じ難いが、間違いなくここで、「何をそんなに驚いているの」と言わんばかりに、この美しい緞が日々生まれているのだ。

インドという国の奥深さをあらためて感じる。日常の営みの中で、淡々と、これほどまでの布を生み出す国は、私を知る限り他にはない。

ことう・ふたば ● 東京生まれ、元・辺境旅系ライター。軽井沢の浅間山麓に住み、現在はデザイン・縫製を主な生業としている。布集めの旅は今も変わらず、どこへでもザックを担いで行く。布服屋リンコル店主。



- 1 タッサールシルクのサリーを広げてみせるこの家の主
- 2 緞のサリーを織る主の弟。織り手は兄弟2人だという
- 3 製糸工場に到着したばかりの白繭。産地は隣のMP州だ
- 4 出来上がった絹糸が干されていた。この状態で織り手に渡される
- 5 どの家にも織機がある村の小道。女や子供は糸捌きや括りの作業を担当する